

お客さんの喜ぶ顔 もう一度

数年前にいったん廃業した家具店の社長とベテラン職人が「もう一度、家具の仕事をと、傷んだタンスやいすを直す「修理屋さん」として再出発している。もうけは少ないが、年配層を中心に「愛着のある家具を捨てずに済む」と好評だ。2人は「喜ばれるのが何よりうれしい」と張り切っている。（吉野太一郎）

廃業の家具店 修理で再出発

社長とベテラン職人奮起

尼崎市三反田町1丁目の「立花家具」。68年10月に創業し、軽飛行機を飛ばして広告するなど地元では有名な家具店だった。

しかし外国製の安い家具に押されたり、アパートやマンションに造りつけの家具が増えたりして、主力商品だったタンスやドレッサーなどの婚礼家具の売り上げが落ち、松本邦男社長(68)は04年3月末で店を閉めた。

婚礼家具を造って立花家具に納入していた西村勝雄さん(76)も96年ごろ廃業。不動産業に転じていたが、「土地の売買は自分には合わない。ま

た家具を手がけられないか」と、隠居していた松本さんを訪ねた。現役のころ、家具造りの傍らサービスで修理をして感謝された経験があったことから、「阪神間には震災で傷んだ家具がたくさんある。きれいにしたら喜ばれるぞ」と誘った。

松本さんも「もう一度、お客さんを回れる」と立ち上がった。05年3月から西宮、芦屋両市を中心にチラシを配った。直後から「震災で傷がついたが、親の形見なので捨てられない」「高価な家具だが製造元は廃業して修理の引き受け手がない」などと高齢者



家具の修理業として再出発した松本邦男さん(右)と西村勝雄さん＝尼崎市戸ノ内町2丁目の作業場

らから注文が相次いだ。

尼崎市内にある西村さんの作業場には、古びた家具が並んでいる。タンスやテーブルは黒ずんだ表面をカンナなどで削り、プラスチックを溶かして傷を埋めた後、塗料を12〜13回塗って新品同様に仕上げる。いすやソファはクッションを張り替え、分解して脚のぐらつきを直していく。

桐タンスなら12万円、テ

ブルなら6万円程度から引き受ける。西村さんの家族を中心に5人で修理に当たるが、依頼は年々増え続け、昨年は計約700万円の売り上げがあった。「ほとんど人件費に消えてしまっただけで利益が上がりません」というが、西村さんは「何より仕事をしていると健康にいい。あと5年は続けたい」と意気込む。問い合わせは立花家具(06・6429・2370)へ。